

## 棋士の情景

～勝負の巖かでは、どんな時代も変わらない～

棋士・九段 島 朗

(第15話)

トップは集中力のかたまり

前回、道の両立に関して書きましたがそれから間もなく、感服させられる出来事がありました。

お隣の囲碁界では、トップの一力遼五冠が地元・宮城の河北新報社の一力雅彦社長の御曹司でもあり、今よりさらに若い頃から社業を継ぐ修業の「二刀流」を頑張っていることで知られています。お人柄も素晴らしく、ご本人はそういう環境を自然に受け止めて見事なまでの両立を果たされ、私から見るとスーパーマンのような畏敬の念ばかりです。

どのような気持ちでご自身を律されているのか…ふだんからとても興味深く感じておりました。

先日、私の弟子で仙台市在住の須田優輝二段が、仙台駅隣接のアエル・丸善書店に将棋の本を見にいきました。大変な努力家でもあり、新著チェックで最新戦法の研究に余念ないルーティンです。その日も普段通り囲碁将棋コーナーに直行し、棚から一冊の本を手にとろうとしたとき、ごく近くの何か異様な空気を彼は感じ取りました（いま思えば、それを感じるほど弟子も成長した証です）。ふっと横を見ると、スーツ姿の一力先生が囲碁コーナーの詰碁の本に集中して、須田君いわく「1秒に1ページのスピード」で詰碁の問題を瞬殺していた姿でした。周囲の空気に圧を与えるくらいの集中する姿と、トップにしてこの鍛錬ぶりに震え上がったそうです。

「上達は98%自習」導いてくれる人はいても、技術は今も昔も自分で習得するほかあり

ません。

現在将棋連盟常務理事を務める森下卓九段は、私が棋士の中でもいちばん親しくさせていただいている方ですが、愛弟子の新鋭・増田康宏八段はA級1年目の将来を嘱望される有望棋士です。それでも弟子の才能を昔から高く評価している森下九段は、多少の活躍では不満らしく、もっと上に行けると常に期待している思いを、昔からよくみてきました。とはいえ、A級までくれば普通に考えて超一流そのものなので、師匠の贅沢な悩みなのかも知れません（笑）。タイトル戦常連で、いつも藤井竜王・名人と好勝負を展開する永瀬拓矢九段の影響が大きかった、と森下さんは以前に言われていました。

その昔、我が家での若手の集いで、永瀬四段は奨励会の増田三段になかなか勝てない状況が続いていました。永瀬さんが顔を真っ赤にして奮戦していたことが思い出されます。そんな二人を見て森下さんは「いまは才能豊かな増田が勝っているけど、いずれ永瀬君の棋界一すさまじい精進が、増田の才能をも凌駕するでしょう。そのとき、彼は自分に何が足りないかに気づく。師匠が何を言うより、それが大きな学びになります」

慧眼とはこういうことだと思います。永瀬当時四段は、上位に行けばいくほど潜在的な知識の集積で棋界を席捲、増田さんを見習うべく精進を重ね、何より永瀬九段に倣うべく集中力を身につけ、今期A級まで躍進しました。集中力はトップの証、身につける薬は師匠の教育でしょうか。すばらしい物語です。